

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2021

「ほがらかに生きる ～大学は知の宝庫～」

第3回 10/20 (水) 13:30～15:00 報告

色と共にほがらかに生きる

講師 廣瀬敏史 (本学准教授)

於：図書館中小セミナー室

◆◆◆◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*

令和3年度第3回公開講座(受講者30名)が10月20日に開催されました。人間関係学部子ども発達学科准教授の廣瀬敏史先生による「色と共にほがらかに生きる」というテーマの講演でした。また講演のあと、パステル等を用いて講演内容を実践に移す実践活動が行われました。

廣瀬先生は、東京芸術大学で彫刻を学ばれた後ドイツ留学をされました。その後10年ほどの造形活動を経て本学8年目というご経歴をお持ちだそうです。会場は廣瀬先生の講演を受講し、実践活動をするのを心待ちにされている受講者の方々で一杯となりました。講演によって色に関する知識を深めたあと、その内容を実践に移すという理論的な要素と実践的な要素が組み合わされた大変興味深い内容でした。その中で特に印象に残った点をご紹介します。

私達の日常生活には自然の色からテレビのスクリーンの色にいたるまでありとあらゆる色に囲まれています。そもそも色が見える仕組みはどうなっているのでしょうか？それは、光の中の波長で、物に反射したり透過した波長を網膜が認識するとき色を感じることでした。私達が見ることができる光、可視光線は380～780nmの波長だそうです。また人の目は約187万5000色もの色を見分けられるそうです。

ニュートンの分光実験の考えが不十分であると異論を唱えたのがゲーテでした。ゲーテの色彩論によると、色彩は自然の摂理と人間の眼の共同作業で決定されるとのことです。受け手の体調や置かれた状況によって感じ方も変わるといえるそうです。色彩論の重要なポイントとして有色残像の発見があります。つまり人の眼は、色に出会うと別の色「補色」を生み出すというものです。さらにゲーテの色彩調和論の色相環という色を施した環では、反対にあるものが補色となっています。例えば、オレンジと青は補色関係にあります。また、色相環は左右で黄色のような暖色と青のような寒色にも分かれています。ゲーテによると寒色系は闇(マイナス)を、暖色系は光(プラス)を表します。よってプラス・マイナスの中間にある赤色は高貴な色であり反対にある補色の緑色は平凡な色になるそうです。

モネやゴッホに代表される 20 世紀初頭の印象派の画家たちは、ゲーテの色彩論を応用し、戸外の明るい雰囲気をとらえることに成功しました。つまり黒色は使わず補色を用いて影を描き光の表現に成功しました。その結果、それまでのダ・ヴィンチやレンブラントのような黒色を使って影を表現していた暗い絵画とは一変しました。

色に関する一連の知識を深めたあと、全受講者が実践活動に移りました。各自、好きなフルーツと表面に凹凸のある好きな色のマーメイド紙を選び、パステルで描いてみようというものでした。その際、影は黒やグレーで暗くするのではなく、補色を混ぜて表現してみようということでした。パステルは、発色が良く最終素材として使用されたり、パステルのみで完成させる絵画もあるほど物質として力のある素材だそうです。またパステルの使い方は、指でこするということでした。受講者の方々は適宜、廣瀬先生からの的確なアドバイスを受けながら実践活動に没頭してみえました。また、とても和やかに楽しそうに作品作りをされていて、実際に「楽しいね！」という言葉が何度も飛び交っていました。正に『色と共にほがらかに生きる』というテーマにピッタリだと思いました。

今回の講演及び実践を経て、日常目にはしている色のなかに実は色んな色が隠れているということが分かり驚きと共に大変感銘を受けると同時に、色への反応や色の見方も変わってくるようにも感じられました。

【講座の様子】

